

会報

善

哉

令和2年9月1日 第51号



東光寺（南矢名）の木造薬師如来立像



背面の墨書

「建長八年大歳丙辰三月八日」

令和2年3月17日、近年研究が進んだ鎌倉時代の「一日造立仏」の貴重な作例である可能性が高いとして、神奈川県指定重要文化財に指定された

(写真提供 秦野市)

秦野歴史おこしの会



先人の築いた文化遺産を糧に、 魅力あふれる秦野へ

秦野市議会議長

今井 実

秦野歴史おこしの会が、平成六年の
発足以来、秦野地域の歴史や文化遺産
を掘り起こし、守り、後世に伝えてい
くため、日ごろから熱心に活動が続け
ておられますことに、心から敬意と感
謝を申し上げます。

市内には多くの貴重な寺院や神社な
どの文化遺産がありますが、それらは、
各地域において、大切な景観の一部と
して存在し、それぞれが歴史を物語る
とともに地域のコミュニティを育む大
切な場として、祭りなどの行事をはじ
め、市民の暮らしの中で、心の財産と
しても存在していると思います。

秦野の歴史や文化遺産を守り、後世
に伝えていくことは、現在の秦野の礎
となった先人たちの多大な努力を認識
し、感謝することにも繋がるものと考
えています。

貴会は、地域の歴史や文化遺産を市
民に広め、地域のまちづくりに繋げて
いく活動もされておりますが、昨年に
は、会のホームページを開設され、イ
ンターネットを介して多くの方が秦野
の歴史や貴重な遺産をより身近に感じ
る事ができるようになりました。

このことをきっかけとして、多くの
方が秦野の歴史に触れることは、その
地域に一層の愛着を持つ機会となり、

秦野をより良いまちにしたいという想
いへと繋がるものだと思います。

秦野市議会としても、市民が「我が
まち秦野」に誇りと愛着を持ち、安心
して暮らしていけるよう、全力を尽く
してまいります。

昨今の自治体運営は、人口減少や少
子高齢化による社会構造の変化、地球
環境の変化により多様化する災害への
対応など多くの課題を抱えています。

市民、行政とともにまちづくりを担
う市議会としても、先人が築いてきた
秦野の歴史や文化、また、秦野の魅力
である豊かな自然を後世に守り伝えて
いきたいと思えます。そのために、歴
史に目を向け、過去から学ぶことを怠
らず、市政に対し積極的に提案を行う
など、議会の機能を更に高め、多くの
市民から「必要とされる議会」となる
よう日々邁進してまいります。

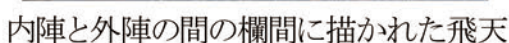
貴会の皆様におかれましては、地域
や人との繋がりを大切にしながら、秦
野の歴史や文化遺産を後世へ伝えてい
くことができるよう、引き続き、御尽
力を賜りますようお願いいたします。

結びになりましたが、貴会の益々の
御発展と、会員の皆様の御健勝と御活
躍を祈念いたしまして、私からの挨拶
とさせていただきます。

三〇〇年を迎えて

秦野市堀西波多川地区には、波多川公民館の看板を掲げた建物があります。この建物は、元々、地蔵堂として建てられたもので、昭和五十年代に改修され集会所になりました。このため、室内には地蔵菩薩坐像が安置されており、毎年一月と七月の二十四日に地蔵尊祭が行われています。仏像は、木造寄木造り（法量六十五・五cm）で体内墨書には、享保五年七月吉日、京大佛師法橋運松門弟木村天部作と書かれています。また体内には、石造菩薩坐像（法量三十・五cm）が納められています。

（注①）。



秦野二十四所地藏尊札所御詠歌（注②）には、第十三番に波多川の堂、「はだかわの流れをむすぶ手のうちにやどれる月の影ぞさやけり」とあります。秦野第二十四所地藏尊の存在については、あまり史料として紹介されていませんが、地域のお念仏で歌われていたことは確かです。

波多川地蔵堂には、明治時代に作られたと思われるお札の木版があり、現在もそのお札を縁日に配っています。お札には、御本尊の御影と御詠歌が書かれており、この御詠歌が秦野二十四所地藏尊のものと同じだと私が気付い

秦野市内にはかつて、お堂（地藏堂、観音堂、阿弥陀堂、十王堂等）があつた場所が自治会館になつてゐる所がいくつかありますが、その大部分は建て替えられ、御本尊が建物の一角に安置されているものの、かつてのお堂の状況を見ることはできません。

現在の波多川公民館の建物がいつ頃建てられたか不明ですが、江戸時代後期に建てられたのではないかと推察しています。公民館に改修した時、主要な柱はそのまま使い、屋根をトタン葺き、窓と出入り口をアルミサッシにしました。が、室内の構造は、お堂の様式を残しております。そのため、須弥壇や壁画、彫刻などが現存しており、秦野市内のお堂の様子を今に伝える貴重な文化遺産ではないかと思ひ、会員の皆様に紹介する次第です。

注①.. 秦野市の仏像 波多川地藏堂
八〇頁 昭和六十三年 秦野市教育委
員会

注②.. 秦野歴史おこしの会 会報第四十三号 秦野二十四所地藏尊を探す
平成二十八年九月

昔を偲び訪ねて歴史を楽しむ

戸口 あや子

当会にて、令和元年に「古写真から見る幕末明治初期の神奈川」の東京大学史料編纂所所長 保谷徹氏の貴重な講演を拝聴した後に興味がわき、写真にのっている場所をたずねてみました。その中で、今回二つご紹介したいと思っています。

まず一つ、箱根湯本三枚橋と七軒茶屋橋は、一つでも三枚橋？。箱根八里といわれた江戸時代の東海道は、湯元で「三枚橋」を渡りました。橋を渡らず温泉場へ向かう道は「湯場道」（ゆばみち）といいました。三枚橋は、江戸時代後期の資料では土橋で、長さ二十二間（約四十メートル）幅一丈（約三メートル）余とありますが、かなり大きな土橋がかかっていたことがわかります。この頃の橋は一つです。では、なぜ「三枚橋」というのでしょうか。

小田原北条時代、早川の川幅は今よりずっと広く、中洲が二つあって三枚の橋が架かっていました。山に向かって地獄橋、極楽橋、三昧（さんまい）橋と呼ばれました。当時は、橋を渡り切ると早雲寺の総門でした。北条氏の



箱根湯本三枚橋と七軒茶屋
「150年前の幕末・明治初期日本」から

菩提寺として権威は強く、寺に逃げ込めばどんな犯罪人も罪を免れました。極楽橋まで逃げると追手は追わず助かったので、次の橋を「これからは仏三昧（ほとけさんまい）に生きよう」という意味で三昧橋と名付け、その名が今は三枚橋として残ったとのことですが、（いろいろな説があると思いますが、これも一つの説です。）

写真をとった後、早雲寺まで歩いてみました。今では住宅地となっておりませんが、「このあたりも早雲寺の領地だったなあ」と思いました。早雲寺の前



現在の三枚橋 早川上流から写す
後ろの山の形が古い写真と同じに思われます

で犬の散歩の人と出会い、その方が「来年は、ここは五百年祭なんだよ」と教えてくれました。澄み切った空気をたくさんいただき、国道に出てマイカーで急ぎ帰途につきました。

二つ目は、芦ノ湖畔の地蔵菩薩

小田原の徳常院に引き取られたと記されていた。小田原駅下車徒歩三十分ぐらいのところに曹洞宗徳常院があり、今は大事に建物の中に安置されています。徳常院の説明によると、江戸駒込八百屋お七の恋人、吉祥寺の寺小姓



曹洞宗徳常院（小田原市）

吉三郎が、お七の菩提を弔うために作った大きな地藏尊という伝説がある。吉三地藏なる別称をもち、銅製の地藏尊像であるとのこと。（八百屋お七の話）お七は、実在する人物で、江戸駒込で火事があり寺に避難した。その時、寺の吉三郎に恋をする。また火事があれば吉三郎に出会えると思い、自分で火をつけ火事を出してしまう。昔はその罪は重く、お七は死罪の刑になった。この尊像は、元箱根芦ノ湖畔の賽の河原に安置されていたもので、像の背



芦ノ湖畔の地藏菩薩
「150年前の幕末・明治初期日本」から

名によれば、江戸増上寺塔頭にいた心誉常念が、正徳三年（一七一三）神田鍋町の鋳物師に作らせ、世の平穏を祈ったものであったが、明治二年（一八六九）の廃仏毀釈で箱根権現が従来の神仏習合形態から神社と寺が分かれることになり、金剛王院は廃止されたので、その管理の本地蔵尊は古物商に売り渡された。これを東京の業者が買い、馬車でこの小田原の海岸まで運び海路輸送しようとしたところ、尊体は地を離れず浜名主等の夢枕に立ったり、また尊体に触れた人々は発熱したりする



現在、徳常院に大事に安置されている地藏尊

状況であつたので、見聞きした人はお賽銭を上げ、見る間に四斗樽に一杯になったと言われる。そこで、当時の世話人や町の有志が六十五両で商人から尊像を買い取り、当寺に安置したものである。大正十二年（一九二三）の関東大震災の時、本像は火災にあつたが損傷なく、戦時の金属回収もまぬがれたとのこと。

歴史に興味を持ち、少しでも歴女に近づきたく、時間をつくり、楽しく日々足を運んでいるこの頃です。

参考資料

- ・ WEST4 旅先案内人コンシェルジュ虎の巻総集編Ⅱ ウエスト4 実行委員会編
- ・ 小田原市徳常院説明板

塔ノ岳と孫佛祭

中村 貢

塔ノ岳の由来

秦野盆地から仰ぐ丹沢山塊においては、塔ノ岳が一番凛々しく鎮座している。この塔ノ岳は、平安時代より山岳宗教（修験道）の地として、天台宗派と真言宗派の山伏の修行の地でありました。現在でも三廻部にある（天台宗）孫佛山観音院と山北にある（真言宗）丹沢山東光院は、ともに塔ノ岳に関連した御寺院です。

東光院の住職によりますと、塔ノ岳の山伏としては、小田原に玉龍坊という山伏の先達がいて、相模一円の天台宗熊野山伏の取締りを行っていた。おそらく、その山伏等が山岳修験のため塔ノ岳山頂付近にあった巨石（関東大震災において崩落）に狗留孫仏如来（黒尊仏または黒孫仏）としてお祭りしたので山伏先達ではないかと言われている。塔ノ岳の呼び名については、山麓の集落の古老に山頂に塔があるので塔ノ岳だと教えられた。塔ノ岳の呼称は、巨石があったので山名へとつながったようであるが、当時の古老たちは、日常塔ノ岳のことを孫仏山と呼んでいた。

明治初年のころ、観音院と東光院とで塔ノ岳の所属の争いがあり裁判になったが、観音院が敗訴したそうです。争いの直接の原因は、寺の発行するお札にあったとのことでした。

余談にはなりますが、住職からお聞きした話の中で、両寺院とも、戦国期以前において丹沢で産出されていた金に深くかかわっていたことでした。残念ながら今では金の産出の痕跡として地名が残っているのみです。

孫佛祭について

毎年五月の中旬に東光院と秦野市山岳協会の共催で、塔ノ岳山頂において安全登山と家内安全を祈願するため孫佛祭を開催しております。今年で再開してから三十年記念の祭りを開催する予定でしたが、残念ながら新型コロナ対策のため開くことはできませんでした。

この孫佛祭の起源は定かではありませんが、毎年五月十五日に東光院の催事として開催されていたものです。当時、この日には関東一円の博徒が集まり、大倉尾根の各地に賭場が開かれ、盛んに博打が行われたとのことでした。六十数年前、登山で大倉尾根を登っていた時、偶然に博打の現場に遭遇した



東光院住職による護摩炊き

経験があると、本町在住の弁護士で登山家の平野義耀氏から聞いたことがあります。また、大倉の古老からは、祭りの日には、そばを打ち、担いで大倉尾根の各賭場で売って歩いた経験談を聞いております。

孫佛祭の詳細については、現在東光院の住職により取りまとめが進められていますので、機会があればご報告させていただきます。

「稻荷木遺跡」

見学会見聞記

小泉 孝

令和二年二月八日、秦野市内の戸川地区にある縄文時代の「稻荷木遺跡」の現場見学会が、公益財団法人かながわ考古学財団と秦野市教育委員会共催で開催されました。絶好の見学日和も手伝ってか、当日二回にわたり約七百五十名の参加者が訪れたとのこと、何がそんなに多くの人の関心を引き付けるのか驚いた次第です。人々の心の中に縄文時代への郷愁が潜んでいるのでしょうか。

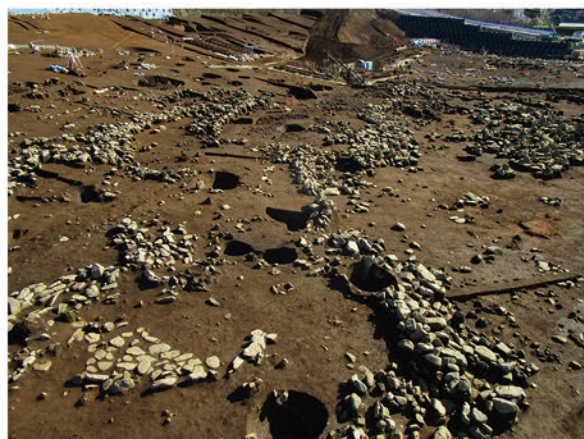
新東名高速道路建設工事に伴う遺跡発掘調査の全容が解明されての見学会です。同じ地区に住む者として「諏訪丸遺跡」や、また「横野山王原遺跡」（火山灰による天地返し）、「菩提横手遺跡」（中空土偶出土）と市内北地区に関わりのある遺跡見学会に参加してまいりました。

遺跡そのものの存在については、「秦野市史」等で以前から知ってはいいたものの、本格的な調査によって、縄文時代の人々の生活の様子がこれほど

までに明らかになって見えて来るとは思いもしませんでした。そういえば、小中学校時代に戸川に住んでいた同級生から、水無川の上流から拾ってきたという土器のかけらを見せてもらったのを今更ながら思い出しました。何かの土器の破片の一部だったのかもしれない。

歴史を学ぶ者として、縄文・弥生時代をただ単にロマンの世界の中のこととしてとらえるだけでなく、目の前に広がる情景から当時の人々の暮らしやその様子を身近に感じてみたいと思いました。

当日解説していただいた公益財団法人かながわ考古学財団の解説員の説明から、当時の人々が、まるで今もな



15区遺構群検出状況

おそのままこの地に立っているが如き様子が頭の中に浮かんできました。時代も環境も当然異なるとはいえ、日々の生活に生きてゆくかということについての腐心は、当時も今もそんなに変わらなかったのではないのでしょうか。むしろ、生きてゆくための知恵は、今日の我々以上に働いていたかもしれせん。

平成二十八年からの発掘調査において、縄文時代から江戸時代までの種々の遺構や建物跡が発見されました。縄文時代後期の集落は、敷石住居跡の居住域、配石墓や土坑墓などの墓域、配石遺構を中心とした祭祀域が確認されました。更に墓域周辺では、地面を削って平らにする大規模な土地造成も



16区J2号住居跡（縄文後期前葉）
（写真提供 公益財団法人かながわ考古学財団）

行われていました。奈良・平安時代では、堅穴建物跡や土坑など、また江戸時代では、宝永の富士山大噴火による火山灰を埋めた「宝永火山灰廃棄遺構」が見つかっています。それから、日常生活や祭祀用に使われていたであろう土器、石器類、その他にも豊穰を願う石棒や女性の身の回りを飾る装身具も多数展示されていて、多くの人の注目を集めていました。

皆さんもご存じのように、郷土秦野は歴史の宝庫です。今年は特にコロナ禍に見舞われ大変な生活を強いられています。改めて歴史、文化について学ぶことの意義を痛感している次第です。

◆令和二年度事業中止のお知らせ

会員の皆様には、日々いかがお過ごしでしょうか。現在新型コロナウイルスが世界で猛威を振るっています。

今年度の事業活動が、さあこれから始まるうとしていた矢先に、コロナ禍による自粛宣言や緊急事態宣言が発動され、出鼻をくじかれた形になってしまいました。

令和二年度の総会の議案は、書面にて承認をいただきましたが、先般の理事会にて今後の方針について慎重な審議を重ねた結果、今年度計画しました

事業は、すべて中止とすることに決定いたしました。先の総会を含めて、講演会、鎌倉方面及び市内東地区研修も併せて中止となります。

断腸の思いではありますが、まずは会員の皆さんの健康を第一に考え、また、今後第二波、第三波のウイルス到来がいつやってくるのか予測がつかないこともあり、断念いたしました。どうかご理解を賜りますようお願い申し上げます。

なお、今年度の年会費につきましては、誠に恐縮ではありますが徴収させていただきます。年間にかかる経費を差し引いた後、残額は、次年度の活動や文化財の修復支援の資金として使用させていただきます。

一日も早い新型コロナウイルスの収束を願い、会員の皆様と共にお目にかかる日まで各自健康管理に十分留意され、ご自愛くださいますよう心から御祈念申し上げます。

(理事長 小泉 孝)

▼新入会員です よろしく

南地区 渡邊 のぞみ

北地区 三嶽 賢一

大根地区 田村 文秀

南地区 草山 清和

◆表紙の題字

「善哉（よいか・よきかな）」
揮毫 蓑毛山寶蓮寺

三十三世住職 東島光明師

『寶蓮寺真名縁起』によれば、聖武天皇の命を受けた行基と良弁が、伊勢の皇大神宮に赴き大仏造立の願いが叶った時、歓喜して舞い、歌い、言ったことばが「善哉、善哉、時哉、時哉」である。（会報第三号から要約）

◆「善哉」への投稿依頼

身近な歴史や文化についての感想、旅先で出会った仏像や神社仏閣についての思い出、独自の研究成果などがありましたら、お気軽にご投稿ください。

〈編集後記〉

新型コロナウイルスの影響で編集会議も開催できず、予定どおり会報が発行できるか心配していました。そのうな中、積極的に原稿をお寄せいただき、無事に発行することができました。お礼申し上げます。次号も、たくさんのお投稿をお待ちしています。

事務局

秦野市羽根七〇七 小泉 孝 宅
電話 〇四六三―七五―〇〇六七